

80年代の視覚障害児教育(9) 盲学校体育をノーマライゼーションの理念で

北海道高等盲学校 鈴木 重男

1. はじめに

現在視覚障害児といわれ、盲学校という狭い空間で手厚い保護のもとで、生活している児童・生徒も数年後には正眼児童・生徒と同じ場に立って社会生活をしなければならない。

盲学校が人格陶冶・学習の場として一番適しているとの理由で、分離された状態におかれていて、ある時期に突然に社会的に統合されるわけである。

体育を指導する者から見て、視覚障害児童・生徒は、社会的・職業的に統合されるが、体育的に統合されることは極めて少ない現実がある。ここに現在の盲学校体育が考えなければならない点があると私は考える。

盲学校の体育とは何か、視覚的にハンディキャップを持った児童・生徒にそのハンディキャップを埋めるよう補助し、配慮した、正眼児童・生徒と同じ内容の体育である。盲学校の児童・生徒に正眼児童・生徒と共通した特殊性ある各連動のイメージを与えたり、各運動特有の技術を習得させる体育である。

盲学校児童・生徒の視覚情報量の少なさ、処理の劣っていることに指導意識を集中するのではなく、配慮してできるところを捜すことに集中しなければならないのではないのでしょうか。連続した視覚的能力のどこかで切られて、盲学校の児童・生徒とならざるをえなかった者を受けもつものとして、なおさらその感を強くするのである。

2. 盲学校児童・生徒の将来の体育を

十数年前の新聞と雑誌に広島盲学校のサッカー指導が掲載されていた。それはちょうど、昨今、新聞に「全盲の●●さん△△マラソンに挑戦する」と書かれているのと同じ扱いであった。全盲でもできるのかとの発想からであろう。しかし、その意味は大きく違うと思う。前者は、体育指導者の体育観から主導されたことであり、後者は、盲学校児童・生徒にも正眼児童・生徒と同じ内容の体育をと考え実践された体育指導者の心が、視覚障害者自身の主体性となって具現化したのではないだろうかと推測する。

ノーマライゼーションの理念のもとで体育を展開した場合、盲学校児童・生徒の心をもゆりうごかし、自らが正眼者社会でのスポーツ活動に参加するという体育的インテグレーションを、今日よりもさらに促すことになるのではないだろうか。

一方、盲学校独自の盲人〇〇という運動を体育の主要な内容とする人もいる。受けもった児童・生徒の実態に即応し運動量を確保するためにはいたしかたのないところもあるが、そのような偏差にみちた運動文化は、盲学校児童・生徒の将来において益になる事が少なかった現実を踏まえなければなるまい。盲人〇〇という運動の全国ルールは、各盲学校や各地域に適合していないのであり、さらにその制限は、反スポーツ的な制限であると考えられる。少ないながらも視覚的情報を得て処理できる者にも「目かくし」させたりする。一般のスポーツにおける制限は、もっと違う観点からである。一つは、アン・ジェントルマンなプレーの制限である。二つは、危険を防止するための制限である。三つは、特有な運動をさらに特有にするための制限であって、人格のもつ基本的な能力を制限するものではなく、それよりも特有な能力をさらに高めるための制限である。

また、一般社会には視覚障害者だけを対象とするスポーツ活動は数少なく、たくさんの同じ障害者が集まれる大都市や、その中でも優れて高い力を持つ人達は、このような状況下においても、盲人〇〇というスポーツを享受することができるが、大多数の視覚障害者は一般社会におけるスポーツ活動においては、埋没したままである。

3. 一般社会のスポーツ活動に参加できる全盲

私個人の体験から述べさせていただくが、盲学校に新卒で入った翌年に、日本ライトハウスに研修に行かせていた

だいたいのことである。日比野さんという私と同年で全盲の訓練生（現在、日本ライトハウス職業・生活訓練センター副所長）とお会いした。彼は、昼休みの食後の運動として卓球の試合をしませんかと言われた。私は、『へん、目も見えないくせになにが卓球だ』と、内心想ったが黙っていた。昼食も終わり休み時間になり、2階の卓球場に行った。日比野さんは、そこで待っており私にこう言った。『鈴木君のラケットを裏がえしにして、ラケットに当たる音を聞こえるようにして下さい』と。その時でさえ、「なにをなまいきな目も見えないくせに』と思っていた。

私は、卓球は得意なほうではないが、人並みの腕を持つと自負していた。私は、口先きで「お願いします」と、言った。ここまで読むともうお解りでしょうが、私は試合に負けてしまったのです。日比野さんは、前陣速攻の形でボールの落下音への反応が速く強烈なスマッシュを持っていたのでした。私は、中学生のころより競技生活を始めており、強い者が善人のような考え方があって、盲学校で児童・生徒を指導していても、きっとそのような考えをもとにした盲人観で接していたことであつた。日比野さんに負けてショックよりも、「これだ、これだ」と言う爽快な気持を味わったのを今でも覚えている。

卓球のようにオープンスキルに属する運動も、クローズドスキルの集積したものと体を通して学び、目が見えなくてもある運動のイメージを持ちながら、配慮されたトレーニングをしたなら、見えなくても見える者に優るものと体感すると同時に、全盲にも普通の卓球をと指導した日本ライトハウスの心に打たれた。

それ以来、運動特有のイメージを全盲児・生徒にどう指導したらよいのか、視覚情報以外の手掛りをどう工夫すればよいのかを考えるようになった。

4. 目が見えないだけのことである

— 目が見えても様々な個人差がある —

先天・早期失明で、イメージのないあるいは、イメージが希薄な児童・生徒を中心に考えてゆきたい。先天・早期失明児童・生徒を中心にするにより、これ以上の視覚能力を有するあるいは中途失明の児童・生徒は、楽に指導配慮できることになる。ここに述べることは、一例にすぎず、各盲学校の諸先輩においては優れたご実践をされていることと思うが、おつきあい願いたい。

1) 体操領域

内容としては、

- ① 一人で行うもの
- ② 複数で行うもの
- ③ 器具を使用して行うもの

になるが、盲学校においては、フォームの指導が一番大切なことになるのではないだろうか。そのために、

- a 言語によって
- b 直接体に触れて修正（後ろから）
- c 指導者の体に触れさせて
- d モデル人形に触れさせて

の方法がある。

2) 個人的スポーツ領域

① 陸上競技

a 短距離走

音源を用いるが、音源は継続音よりも断続音のほうがよく、車のバックブザーが安価で使用しやすい（12V）が、風向きを考えセットしなければいけない。

b 長距離走

ア. グラウンド内周回で行う場合は、コーナーに走る方に向けて音源をセットする。介助が必要な場合は、鈴を2、3個ポケットに入れ、前走するか、肘を軽く接触するようにして併走(生徒の腕は・自由に振らせる)する。

イ. 街路を走る場合は、Sonicguideを使用すると慣れると前走だけでよいが、それ以外は、鈴を用いる方法や肘を軽く接触させる方法がよい。

c 走り幅跳び

跳ぶ方向に音源をセットして

ア. 短助走で踏み切らせる。

イ. 踏み切の数歩前(決めておく)に、特色あるマットを敷く。

ウ. 踏み切りの数歩前こ、接点スイッチを持った横バーを置き、通過すると音刺激が出るようにする。

d 走り高跳び

短助走で行わせる。ベリーロールや背面跳びのように、バーのそばで踏み切る形がやりやすい。

e 砲丸投げ、円盤投げ

投げる方向に音源をセットする。さらに押し出す角度を指導するために、竹バー等の先に鈴をつけて指導する。

② 器械遊動

7、8年前千葉盲学校ですばらしい実践がなされていた。

a 鉄棒

高鉄棒の指導の経験はない。低鉄棒においては、フォームのイメージをしっかりと持たせる。

b マット運動及び平均台運動

平均台の指導経験はない。マット運動は鉄棒と同じようにフォームの指導をしっかりと行う。

c 跳び箱運動

着手する部分を3分割して、着手する所をはっきりと解るようにしてやる。

あおむけとび等は、ぶつかったり、落ちててもよいように、跳び箱の回りにマットを巻いておく。

③ 水泳

音源とコースロープを用いると一人で自由にこなせる。現在プールサイド数m前にあぶくを放射する装置を持ったプールも出てきているので、この場合クロールのフリップターンも指導しやすくなる。

④ スケート(アイス、ローラー)

周回コースの場合は、コーナーに音源をセットすることにより、位置の自己確認もしやすくなる(スピーカーの音も同じである)。アイススケートでは、前走者等の蹴る刃の音も利用できる。ローラーズケートとスクエアーの場所での指導経験はない。

⑤ スキー

a アルペン系

スキー場の地図を作っておく

ア. リフトの塔(ほとんどスピーカーが設置されている)

イ. 斜面変化(凸凹、緩急、上下等)の2点を情報として入れておき、滑べる前に太陽が出ていれば、地図の方向と太陽の方向を指導する。

生徒の能力により

あ. 前をバックのブルークで滑り、指示する。

い. 後ろから指示する。

う. パラレルになって横で指示する。

え. 前を音源をもって滑る。

の段階で情報を与えてやる。

b クロスカントリー系

しっかりしたコースが整備されたならば、これ程視覚障害児童・生徒に適するものはない。コースからはみ出さない限り、一人で自由に楽しむことができる。普通のコースでは、

ア. 数10m前の状態を指示する。

イ. 状態が変化する5m位前でスキー技術も含めて指示する。

が、慣れると鈴を持って前走するだけでよい。ただし急な下り坂は、生徒と共同してブルーク(内側の膝、肩をくっつけ、内側のスキーと靴もくっつけて、両者の外側のスキーで行う)姿勢を形作る。

3) 集団的スポーツ領域

バスケットボール、バレーボール、サッカー、ハンドボールがある。そのいずれも鈴入りボールを用い、ゴール裏に音源をセットする。また競技場のアウトラインを点図にする。

① バスケットボール

ドリブル、パスを送る、シューティング、バウンド数の多いパスの捕球はできるので、所属するグループの実態に合わせ実際のルールに似せたルールを、全盲生に適用する。

② サッカー

③ ハンドボール

の2種目もバスケットボールと同じ扱いで行える。

④ バレーボール

サーブとクイックのスパイクおよびブロッキングは、可能であるのでそれを生かせるように、全盲生にのみ適用するルールを工夫する。

いずれにしても浮いたボールを相手にするので、目を保護するための眼保護用ゴーグル(ショックに弱い児童・生徒すべてに)を常用させる。

4) 格技領域

柔道の指導経験しかないが、柔道は視覚的ハンディキャップがほとんどない運動であり、私が勤務する学校では以前のような活動がみられないが、町道場に通って修練していた全盲が過去に数人いた。

結局、全盲児童・生徒への体育における指導配慮は、

① いかにして特有な遊動のイメージを持たせるか。

② いかにして位置を定位してやるか。

の2点につけるのではないだろうか。

トレーニングさえ積みめば、正眼も全盲も同じ結果を見るのは明かなことである。

5. おわりに

学校体育の範ちゅうの運動の他に、ボーリング、アーチェリー、ゴルフ、ボート、ウェトリフティング、社交ダンス、つり、ハイキング、登山、キャンプ、オリエンテーリング等々の商業スポーツ・社会体育的スポーツなどについても、体育としてあるいは体育的行事として指導し、生涯的にスポーツ活動を生活の中で享受できる実行体に、あるいはチャンスがあればやってみたくて意欲を持たせる可能体に児童・生徒の状態にするのが、分離された教育の場にある盲学校の体育に課せられた使命ではないだろうか、と考えます。